

聖マリアンナ医大新聞

主な内容

令和7年度 医学部卒業証書・学位記授与式/他	(第1面)
受賞者からひとこと/看護専門学校 卒業証書授与式	(第2・3面)
令和7年度大学院医学研究科 学位記授与式/他	(第4面)
定年のごあいさつ/定年退職者一覧	(第5面)
就任のごあいさつ	(第6面)
就任のごあいさつ/令和8年度医学部医学科 入学式	(第7面)
令和8年度看護専門学校入学式/他	(第8面)
長崎県五島市・聖マリア病院を訪問/教室・施設紹介/他	(第9面)
科学研究費補助金・交付決定者一覧/他	(第10・11面)
附属病院・施設だより/他	(第12面)

聖マリアンナ医科大学・新聞編集委員会 〒216-8511 川崎市宮前区菅生2-16-1 ☎044-977-8111(代) 総務課 <http://www.marianna-u.ac.jp>

令和7年度第50回 医学部医学科 卒業証書・学位記授与式

AI時代にも変わらぬ「温かな心」と「マリアンナスピリット」を胸に —新時代の医療人へ—



明石勝也 理事長 北川博昭 学長 加藤智啓 医学部長 岸忠宏 聖医会会長

第50回医学部医学科卒業証書・学位記授与式は、令和8年3月6日(金)に執り行われた。今年度の卒業生に対して、北川博昭学長より一人ひとりに卒業証書・学位記が手渡された。

続いて「明石賞」、「医学会賞」、「聖医会賞」、「保護者会賞」が表彰された(2面に受賞者の声)。

学事報告では、加藤智啓医学部長より、卒業生は6年間で講義と実習を合わせて総時間数7,110時間を履修し、コロナ禍という困難を乗り越えて所定の課程を修了したことが報告された。「これにより、生命の尊厳について深い認識を持ち、正しく判断・行動し、生涯にわたって実践し得る基礎を確立するという、本学のディプロマ・ポリシー(卒業時の到達目標)を達成した」と述べられた。本学を卒業し活躍する医師はすでに5,067名にのぼっており、そこに新たな仲間が加わることとなった。

北川博昭学長は式辞において、卒業生の入学時がちょうどダイヤモンドプリンセス号の入港やコロナ禍の始まりと重なり、入学式が挙行できず、図らずも入学と同時に限界に挑む「医療の真髄」を肌で感じるようになった世代であることを振り返った。困難な環境下でも学びを止めず、今日を迎えた仲間との絆は一生の財産となると称えた。

さらに、AIの進化や新薬の開発、

再生医療など医療技術が目覚ましい発展を遂げる現状に言及しつつも、「どれほど治療が進歩しても、医師の仕事の半分は常に患者の心のケアにある」と述べた。そして、「AIにはできない、一人の人間として患者の心と身体の痛みを理解し、共に歩むことができる医師になってほしい」と強く語りかけ、最新の知と温かな心を持って病める人の人生に寄り添えるよう期待を寄せた。

明石勝也理事長は祝辞で、「医学教育において卒業はゴールではなく成長への過程であり、生涯にわたり学習と修練を続けてほしい」と求めた。また、国際秩序の変容や少子高齢化など、予測を遥かに上回るスピードで進む社会の激動に触れた。そのような変革の時代にあっても、「諸君には本学で培ったマリアンナスピリットという大きなアドバンテージがある。自信をもって前進してほしい」と力強く語り、「迷いが生じたときには、いつでも母校を頼ってください。聖マリアンナ医科大学は、永遠に諸君の信頼できる支援者であり続けます」と述べ、新時代の伝統を自らの手で創り上げるよう期待を寄せた。

聖医会の岸忠宏会長からは、医療が高度化・多様化しても患者一人ひとりに寄り添い、その人生と真摯に向き合う姿勢は決して変わらないとし、それこそが本学が大切にしてく

た原点であるとの言葉が贈られた。さらに「医師という職業は、生涯学び続ける使命を負うと同時に、人々の希望となり得る崇高で誇りある道でもある。初心を忘れず、謙虚さと情熱を持って社会に貢献してほしい」と激励があった。

続いて卒業生代表による宣誓・送辞・答辞(2面に詳細)、記念品(ステンドグラス)の寄贈、小田武彦司祭による祈願が行われた。多くの祝福と励ましを胸に、110名の卒業生は新たな時代の医療人として第一歩を踏み出した。



宣誓する石橋賢人さん



小田武彦司祭による祈願



春夏秋冬

自然な看取り

昨年11月29日早朝、老人ホームで元気に過ごしていた99歳の母が意識不明で病院に救急搬送されました。私が高校生の頃から、母は「私が倒れても延命治療

はしないでね」と言っていました。それで、兄と姉と私は病院に「延命措置は希望しません」と電話で伝えた上で駆け付けました。

夜勤をしていた脳神経内科医師は「入院する5時間以上前に左脳で脳梗塞が起きたようで、脳内出血もあるために、手術も延命措置

もしていません」と適切な判断をした上でこちらの希望を聞き入れてくださっていました。それでも母には、水分補給の点滴と生体情報監視装置が装着されていました。救急病院に滞在できるのは3週間が限度だと聞いていたので、半身不随、失語、嚥下障害になった母を

どこに転院させるか、兄弟で思いっきり悩みました。喉の渇きで母を苦しませることになるのではないかと心がざわつきましたが、母なら医療行為ができる病院に転院するよりも住み慣れた老人ホームに戻ることを選ぶだろうと判断しました。

12月19日、母は点滴

や生体情報監視装置から解放されて老人ホームの自室に戻りました。口からの水分補給が一滴もなく、母はいつも穏やかな表情で過ごしていました。老人ホームは24時間体制で毎時間、母の様子を記録していただきました。その記録によると、12月28日の朝、

眠っている間に息を引き取ったようです。

母は自然な看取りのおかげで、安らかに亡くなることができました。私たち兄弟は転院先についてあれこれと悩みましたが、杞憂に終わる体験学習をさせていただきました。

医学教育文化部門 特任教授 小田武彦

受賞者からひとこと

明石賞

植村 直弘



この度は明石賞という荣誉ある賞を賜り、大変光栄に存じます。心より御礼申し上げます。コロナ禍が始まった6年間の学生生活はあっという間でした。勉学、部活動、短期留学と学生生活を支えてくださった家族、先生方、大学関係者の皆様、先輩・後輩、友人たちにこの場をお借りして、感謝申し上げます。

母校で培った学びを礎に、仲間と切磋琢磨し、患者さんに寄り添い、今後の医学に貢献できるよう、日々邁進してまいります。

明石賞

中島 梓



この度は明石賞という大変名誉ある賞を頂戴し、心より感謝申し上げます。このような賞をいただけたのも、6年間温かくご指導くださった先生方をはじめ、共に助け合い切磋琢磨してきたバレー部の仲間や友人、そしてこれまで支えてくださった先輩方と家族のおかげです。

皆さまへの感謝を胸に、今後も学びと研鑽を重ねながら、患者さん一人ひとりと真摯に向き合い続ける医師となれるよう努めてまいります。

明石賞

郡 薫



このたびは素晴らしい賞をいただき大変光栄に存じます。受賞は予想外であったので、驚きとともに身の引き締まる思いです。これまで支えてくださった家族や先生方、同期の皆に深く感謝を申し上げます。皆様との交流を通じて医学だけでなく多くのことを学ばせていただきました。6年間の経験を糧に、よき医師となれるよう精進してまいります。そして、これまで頂いたご支援に応えられるように真摯に働き続けていきたいと考えております。

医学会賞

川合 千尋



この度は医学会賞という素晴らしい賞を頂戴し、大変光栄に思います。

新型コロナウイルスの流行下で学生生活が始まり、勉学や人間関係のことなどで不安を感じる日々もありましたが、大学の先生方や部活動の先輩・後輩、家族、そして一緒に壁を乗り越えてきた50期の友人たちのおかげで、大学卒業を迎えることができたと感じています。

支えてくださった皆様に心より感謝申し上げます。今後も学びを絶やさず、医師として社会に貢献できるよう精進してまいります。

聖医会賞

土屋 朱璃



私は国試対策委員長として、CBTやOSCE、卒業試験、国家試験に向けて学年全員が最大限の成果を発揮できるよう努めて参りました。自分の勉強時間が確保できず不安を感じることもありましたが、同期の国対委員が皆のために尽力するメンバーであり最後まで走り抜くことができました。個人としては4年次に日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会国際セッションでYIAを最年少で受賞し、ソフトテニス部でもリーグ優勝を果たしました。勉強や部活、委員会、アルバイトを両立し充実した学生生活を送ることができました。今後も様々なことに挑戦し、医師として学びを深め続けていきたいと思っております。

保護者会賞

中村 魁



この度は素晴らしい賞をいただき、大変光栄に存じます。在学中は学内の諸委員会に参画させていただきました。これらの活動を通じて、大学の発展に少しでも貢献できていれば幸いです。

保護者会等のご支援のもと、学園祭やオープンキャンパスなどの再始動に携わる中でチームの大切さを学びました。教職員の皆様や友人をはじめ、本当に人に恵まれた六年間でした。

この感謝を忘れず、今後とも大学のさらなる発展に力を尽くしてまいります。

宣誓



卒業生代表 石橋 賢人

本日、私たちは卒業の日を迎えることができました。医師としての第一歩を踏み出すこの日を迎えられましたことを、心より嬉しく思います。不安や戸惑いを抱えながらも、同級生と支え合い、励まし合いながら今日まで数々の試験や実習を乗り越え、学び続けてきました。日々の講義や臨床実習を通して、医学の知識や技術だけではなく、医師として生きる上で大切なことを学びました。患者一人ひとりと真摯に向き合い、生命の尊厳を重んじて医療に向き合う姿勢です。

これから私たちは医療の現場に立ち、多くの困難や課題に直面することになると思いますが、本学で学んだ精神と教養を胸に、医師としての責務を果たしてまいります。

～宣誓～

私たち卒業生は、本学の建学の精神である「生命の尊厳」を心に刻み、医の倫理を踏まえ、着実に努力を重ね、医道の実践に万全を期し、以て近代医学の進歩発展と地域社会への貢献に尽くすことをここに誓います。

送辞



在学生代表 田村 香葉

第50回卒業生の皆様、ご卒業おめでとうございます。先輩方が医学の道を志し、夢と希望を抱いて本学に入学されたのは6年前。学生生活の前半は、新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受け、そのような困難な状況の中でも、先輩方はできることを模索し、学びを止めることなく努力を重ねてこられました。入学当初、不安でいっぱいだった私たちに、先輩方は学業のみならず大学生活のあらゆる場面で親身に寄り添ってくださいました。優しく、時に厳しく接してくださった日々は私たち在校生にとってかけがえのない宝物です。

これから先輩方は、医師として臨床の現場へと羽ばたかれます。「生命の尊厳」を基調とし、愛にあふれた医療人として、無限の可能性を秘めて未来に羽ばたく先輩方を、在校生一同、心から応援しています。そして私たちも、先輩方の背中を追いかけて、一歩ずつ医師への道を歩んでいきます。

最後に、卒業生の皆様のご健康とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

答辞



卒業生代表 高山 道絵

本日はご多忙の中、多くの先生方、ご来賓、ご親族の皆様にご臨席賜り、卒業生一同、心より御礼申し上げます。

6年前、新型コロナウイルス感染症が流行する中、本来行われるはずであった入学式は中止となり、学生生活は静かな始まりを迎えました。やがて、全員で授業を受け、同じ空間で同じ時間を共有できることの貴重さを、自然と感じられるようになりました。

5、6年生で臨床実習に臨む中で、私たちは患者さん一人ひとりと向き合う経験を積み重ねてきました。現場の空気に触れ、教科書の知識だけでは捉えきれない場面に数多く出会いました。人の人生に関わることの重みを実感すると同時に、医療は、知識や技術の積み重ねにとどまらず、目の前の人と向き合い続ける姿勢が問われる営みであることを学びました。

こうした私たちの学生生活は、先生方や教職員の皆様のご尽力によって支えられてきました。この学び舎で培った姿勢は、これから先も私たちの拠り所であり続けるはずで

私たちを導いてくださった先生方、支えてくださったすべての皆様に、卒業生一同、深く感謝申し上げます。



令和7年度第47回 看護専門学校卒業証書授与式

「マリアンナスピリット」と「慈しみの心」を受け継ぎ、新たな地域医療の担い手へ

第47回看護専門学校卒業証書授与式は、令和8年3月5日(木)に執り行われた。3年間の厳しい研鑽を積み重ね、医療専門課程を無事に修了した72名の卒業生に対し、鈴木昌子校長から卒業証書が授与された。本校の卒業生総数はこれで4,243名となった。

学事報告では、清水泰子副校長より、臨地実習を含めた3年間における講義と実習の総単位数が103単位、総時間数は2,985時間に及んだことが報告された。また、今年度卒業を迎えた47回生について、「慎重に確認行動を積み重ねること」や「他者からの助言を素直に受け入れ、行動へと繋げることができる」という優れた特性を存分に発揮し、困難な局面においても勤勉に努力を続け、看護

の道を一歩ずつ真摯に切り拓いてきたことが称えられた。そして、卒業生としての誇りと責任を深く胸に刻み、人々の生命と健康を支える看護師として広く社会に貢献してほしいとエールが送られた。

明石勝也理事長は祝辞において、団塊の世代がすべて75歳以上となった「2025年問題」を経て、本年2026年が日本の医療にとって極めて重要な節目であり、国が「新たな地域医療構想」へと舵を切ったと述べた。これからは「治す医療」から生活の場を支える「治し、支える医療」へのシフトが鮮明になり、病院完結型から地域完結型への移行が進む中で、その中心的な役割を担うのは間違いなく看護師であると激励した。そして、高度化する医療現場でのタスク

シフトにより看護師の職域や責任が急速に拡大していることに触れつつも、最も大切にしたいのは本学の精神である「マリアンナスピリット」であると力説した。「善きサマリア人」の精神や、「苦しんでいる人が居たら、放っておけない」という愛の原理を忘れず、目の前の患者さんに寄り添い共感する心こそが医療の原点であると語りかけた。

続いて、北川博昭学長は、超高齢社会の最前線ともいえる長崎県の五島列島・福江島にある聖マリア病院を訪れた際のエピソードを紹介した。そこでは、本学の初代神父であり宗教学の教授を務めた山本善二郎先生が蒔かれた「人類愛」の種が、シスターたちや本学卒業生の病院長によって今も豊かに実を結んでいると語った。キリスト教の教えが深く根付き、損得を超えた「慈しみの心」で互いを思いやる島の人々の姿に触れ、「どれほど治す技術が進化しても、医療の魂は、目の前の一人に寄り添う看護の中にある」と説いた。さらに、AI



などの技術が高度になればなるほど人は人の温もりを求めるとし、「患者さんの手を握り、その人生の物語に耳を傾ける看護師の存在は、暗やみを照らす一筋の光となる」と、温かな心を持って病める人のもとへ向かうよう言葉を贈った。

さらに北原日美紀 大学病院看護部長からも卒業生を激励する祝辞が続いた。その後、学生代表による送辞・答辞と続き(詳細は3面)、小田武彦司祭による祝福の祈りが捧げられた。

多くの来賓や教職員、保護者からの温かい祝福と励ましを胸に、72名の卒業生は、人々を癒やし希望を灯す新たな時代の看護師として、それぞれの医療の現場へと力強く羽ばたいていった。

受賞者からひとこと

理事長賞

まつかわ はな 松川 巴南



授業、演習、課題、試験、実習にひたすら向き合い積み上げてきた3年間。卒業式という節目を迎え、理事長賞という栄誉を賜り、嬉しさと共に、どこに行くにも抱えていた本をそっと閉じるような寂しさも感じています。

自分を支えてくれた周りの人への賞として受け取る喜びへと変わっていきました。

これまで支えてくださった皆さま、本当にありがとうございました。今日の想いを胸に刻み、これからも学び、成長し続けたいと思います。

同窓会賞

おがさわら あすか 小笠原 明日香

この度は伝統ある同窓会賞をいただき、身の引き締まる思いです。この3年間を振り返ると、私の成長の傍には常に支えてくださった方々の存在がありました。

皆様との出会いがあったからこそ、私は看護を通じて人の温かさを改めて実感しました。この賞は私1人の努力ではなく、関わってくださった全ての方々からいただいたものだと感じています。初心を忘れず、知識だけでなく心に寄り添う温かな看護を実践できるよう精進してまいります。

皆勤賞

おがさわら あすか 小笠原 明日香



3年間、1日も休まず登校できた証として皆勤賞をいただけることを、大変嬉しく思います。振り返れば、この3年間は課題や実習を通して看護と向き合う日々でしたが、大きな病気や怪我をせず、気付けば1度も休むことなく卒業を迎えていました。3年生の実習では多くの患者様と関わらせていただく中で病と懸命に闘う方々の強さに触れ、健康でいられることがいかに恵まれた幸せなことかを痛感しました。卒業後も日々の体調管理を怠らず、常に万全の状態で患者様と向き合い、信頼される看護師になれるよう努力していきます。

送 辞



在校生代表 早川 玲子

日増しに暖かさが感じられ、沈丁花の香りがほのかに漂うこの佳き日に、看護の道を志し、研鑽の道を歩み抜かれた卒業生の皆様、ご卒業誠におめでとうございます。看護という尊くも厳しい世界に向き合い、知識と技術の習得に励まれた3年間は、決して平坦な道のりではなかったこ

とと拝察いたします。膨大な講義や演習、緊張の中で臨まれた臨地実習、そして国家試験に向けて寸暇を惜しんで努力を重ねてこられた日々。そのすべてをやり遂げられた先輩方の歩みは、私たち在校生にとって何よりの目標です。先輩方という目標があったからこそ、私たちは今日まで歩を進めることができました。先輩方が築いてくださった温かい看護の精神を受け継ぎ、私たちも成長してまいります。最後になりましたが、卒業生の皆様のご健康とますますのご活躍を心よりお祈り申し上げます。

答 辞



卒業生代表 関 希実

冬の寒さも和らぎ、やわらかな春の光が降り注ぐ今日の佳き日に、私たち72名は卒業の日を迎えることができました。振り返りますと3年間は決して平坦なものではありませんでした。1年生では、看護技術の習得のため、練習を重ねました。仲間と励まし合い、できるまで諦めず

に取り組んだ日々は、今の私たちを支える土台となっています。3年生の実習では、思い描いていた看護を実践することの難しさを痛感し、葛藤することの連続でした。患者様から「あなたがいてくれて心強かった」とお言葉をいただき、看護師を目指す決意をより一層強くしました。支えてくださった先生方、指導者の皆様、家族、そして仲間へ心より感謝申し上げます。これから「生命の尊厳を大切に看護」の実践者として、患者様に真摯に向き合える看護師を目指して歩んでまいります。



令和7年度 大学院医学研究科 学位記授与式

大学院入試委員長 高田 礼子

令和8年3月25日(水)、本学大学院の学位記授与式が、多くの教職員や新医学博士のご家族が参加されるなか、賑々しく執り行われました。当日は、明石勝也理事長、北川博昭学長、加藤智啓医学部長、遊道雄研究科長をはじめ、新医学博士および指導教授らがアカデミックガウンを身に纏い、式典は厳かな雰囲気に包まれました。

式典では、北川学長より新医学博士一人ひとりに学位記が手渡され、

祝辞が述べられました。あわせて、令和7年度学位授与者の中から、優秀な論文を発表した杉山瑠菜氏〔未来がん医療プロフェッショナル養成コース〕、竹本昌紘氏〔整形外科学〕、赤松伸太郎氏〔高度臨床医育成コース(内科学)〕の3名に優秀学位論文賞が、佐藤工講師〔難治性疾患病態制御学〕に優秀指導賞がそれぞれ授与されました。これらの受賞論文以外にも、学位論文のほとんどが国際的な学術専門誌に掲載されており、

今後も益々優れた学位論文が発表されることが期待されます。

明石理事長、遊道研究科長からの祝辞に続き、優秀学位論文賞を受賞した杉山瑠菜氏が修了生を代表して答辞を述べました。最後に小田武彦司祭による祈願が執り行われ、学位記授与式はつつがなく終了しました。式典後には参加者による集合写真が撮影され、新医学博士の門出を祝うとともに、本学の医学研究の発展を祈念する想いを共有する時間となりました。

大学院には、次世代の医学教育、研究並びに医療を担う有能な医療人・医学専門家を養成し、医療と学術研究の発展向上を通じて社会の充実に貢献することが求められています。来年度も、多くの方が高い志を持って本学大学院に進学されることを期待しております。



祝辞を述べる遊道雄 研究科長



北川学長より学位記を授与される
大学院生

◆ 令和7年度 国家試験結果報告 ◆

医学部

104名の医師が誕生

国試委員会委員長 長田尚彦

2026年(令和8年)2月7日(土)・8日(日)に実施された第120回医師国家試験は、全体で9,980人が受験し、合格率は91.6%でした。本学卒業生は104名(新卒95名、既卒9名)が合格しました。全体の合格率は90.4%(全国平均91.6%)であり、受験生は非常に健闘しました。

新卒者は104名が受験し95名が合格、合格率は91.3%でしたが、私立大学31校中27位、全国82大学中77位と、やや厳しい結果となりました。本学のこの学年は、1年次にコロナ禍で入学し、その後の6年間を通して困難な環境下で学修してきた世代です。大学として多くの取り組みを手探りで進めざるを得なかったとは思っています。

しかしながら、国家試験合格率については昨年同様、全体としてやや厳しい結果であったことも事実です。来年度は一昨年と同程度の合格率ま

で回復させることを目標に、国家試験委員会を中心として新たな施策を実施していく予定です。特に、初回の卒業判定で合格となった82名のうち、成績下位10名中3名が不合格となった点については、早期卒業決定後の緊張感の緩みが一因であると考えています。このため来年度以降は、こうした油断を最小限に抑える目的で、最終卒業判定時期を1月へと後ろ倒しするなどの新たな対応を導入する予定です。

第6学年の学生は、長期にわたる臨床実習と並行して国家試験対策に懸命に取り組んでいます。第6学年担当教員の皆様におかれましては、引き続きご指導賜りますようお願い申し上げます。また、本学および関係するすべての皆様におかれましては、今後とも厳しくも温かいご指導を賜りますよう、重ねてお願い申し上げます。

看護専門学校

68名の新たな看護師の門出

国試・学習支援担当 小陽慶子

2026年2月15日(日)に実施された第115回看護師国家試験の合格発表が、3月24日(火)に行われました。受験者数は59,614人、合格者数は52,666人で、全体合格率は88.3%であり、前回の90.1%から低下した結果となりました。当校からは、今春卒業した48回生72名と既卒者1名の計73名が挑み、68名が見事に合格を果たしました。残念ながら全員合格という目標には届きませんでした。当校の合格率は94.4%を記録し、全国平均の88.3%を上回る成果を取ることができました。

48回生は、臨床実践能力を育成する看護教育課程の103単位(2,985時間)を習得し、3年次には半年以上にわたる臨地実習を大学病院や地域包括ケアの現場など、多様な臨床現場で実践力を磨いてきました。タイトなスケジュールと高度化する試験内容という厳しい環境下で、48回生が

互いに励まし合い、最後まで机に向かい続けた努力と、年間を通じての国家試験対策による学習支援、教員2人がパートナーシップをとり、個々の学生の学習状況に応じた個別学習支援が、この結果を引き寄せたのだと感じています。

昨今、医療の現場では、職種の垣根を越えて協力し合い、チーム全体でより質の高いケアを目指す動きが加速しています。看護師に任される役割も、これまで以上に広がっており、新しい知識を柔軟に取り入れながら、患者さんの心に寄り添う優しさを忘れない、そんな頼もしい看護師として成長し続けてほしいと願っています。

最後になりますが、学生の成長を支えてくださった皆様に深く感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

青木治人 元学長が 瑞宝中綬章を受章



令和8年春の叙勲において、本学元学長の青木治人先生が、教育・研究分野にわたる永年の功績により、瑞宝中綬章を受章されました。

青木先生は、平成6年に整形外科学教室主任教授に就任して以来、長きにわたり本学の発展、並びに医学の進展に寄与されました。その卓越した教育・研究への情熱は、現在も多くの教職員に受け継がれています。

本学では、大学病院長や学長、さらには学校法人の理事や顧問を歴任され、私立医科大学を取り巻く環境が激変する中、教育・研究・診療分野の拡充、強固な経営基盤の構築、並びに本学の社会的信頼の向上に多大なる貢献をされました。

今回の受章は、これら永年にわたる青木先生の献身的な功績が高く評価されたものです。

【略歴】

- 平成6年4月 聖マリアンナ医科大学 整形外科学教室 主任教授 (平成12年3月まで)
- 平成12年4月 聖マリアンナ医科大学 整形外科学教室 教授 (講座代表) (平成16年3月まで)
- 平成13年4月 聖マリアンナ医科大学病院 病院長(平成14年3月まで) 学校法人聖マリアンナ医科大学 理事 (平成29年3月まで)
- 平成14年4月 聖マリアンナ医科大学 学長 (平成20年3月まで) 聖マリアンナ医科大学 大学院医学研究科 科長 (平成17年3月まで)
- 平成20年4月 聖マリアンナ医科大学 名誉教授
- 平成23年4月 学校法人聖マリアンナ医科大学 副理事長 (平成29年3月まで)
- 平成29年4月 学校法人聖マリアンナ医科大学 顧問 (令和6年3月まで)

定年のごあいさつ

人との出会いに恵まれた 10 年

神経精神科学 主任教授
古茶 大樹



2015年に本学を揺るがす精神保健指定医の問題があった。縁あって、この指定医問題で大きな打撃を受けていた「神経精神科の講座を立て直せ」というミッションを課せられ、2016年1月に赴任した。当時、すでに多くの人が去っていた医局はしずまりかえっていたことを思い出す。迎えてくれた医局員はまさに満身創痍だったが、皆優れた臨床家であったことが大きな救いだった。実のところ、私一人が赴任したところでどうにかなるわけではなかった。多くのヘルプが入ることで、診療科としての運営と学生教育がギリギリのところでも成り立っていたのである。すっかり自信を失ってしまった医局員の自己価値をどうやって回復させることができるのか—振り返ってみると私は彼らに支持的精神療法をしていたように思う。

赴任して間もなく、もう一つ大きな問題があることを知らされた。それが研究不正の問題である。まさかこの問題が国会で取り上げられるよ

うな事態にまで発展するとは誰も想像していなかっただろう。

大きな困難を抱えながらのスタートだったが、この厳しい状況をよく知った上で、一緒に仕事をしたいという人が集まってきてくれたことは大変嬉しかった。多くの力が結集することで講座は少しずつ軌道に乗っていったように思う。任期後半には自分の子供と同じ職場で仕事をする機会にも恵まれた。

さて講座の復興はどれだけ実現できたのだろうか。安定して新入局員を迎えることができるようになり、医局は活気を取り戻している。新病棟の移行も心配したが乗り越えることができたと思う。そして頼もしい後任にバトンタッチすることもできた。私に課せられたミッションは概ね達成できたのではないかと今は胸を撫で下ろしている。振り返ってみると人との出会いに恵まれた充実した10年だった。マリアンナに来て本当に良かったと思う。

40年間の医師人生を振り返って

川崎市立多摩病院 病院長
長島 梧郎



2026年3月31日をもって、聖マリアンナ医科大学を定年退職することになりました。18年間、皆様には本当にいろいろな面でお世話になりました。

1985年に東京医科歯科大学(現東京科学大学)を卒業し、関連施設で脳神経外科医としての研鑽を積み、1995年からは昭和大学藤が丘病院に移り、多くの症例を経験させて頂きました。この間、師と仰ぐ多くの方々に教えられ、育てて頂きました。留学したNIHでは、神戸大学の医学部長になった南先生、アルツハイマーの研究でノーベル賞候補になった高嶋先生、東大の斎藤延人先生、川合謙介先生など、様々な方々と交友を深めることができました。振り返れば、こうした人との出会い、繋がりがこそが、人生の本流なのかと思えます。折しも昭和大学でオール昭和の動きが強まったのを機に、2008年に昭和大学から聖マリアンナ医科大学に移りました。この時も、当時の藤が丘病院の真田病院長や中田幸之助理事、橋本卓雄教授に大変お世話になりました。附属病院は大学本院以上に、本業以外の横串となる活動が要求され、配属された東横病院で当

時の舟木病院長から感染制御と医療安全を委ねられることになります。そしてこれが、その後の川崎市立多摩病院の副院長、そして2015年から始まる医療機能評価機構のサーベイヤーに繋がります。ここでさらに人との繋がりが広がります。病院管理の師と仰ぐ上尾中央病院の徳永英吉先生、浜松医大の小林利彦先生、中部国際医療センターの佐合茂樹事務長、日本医大の山本臣生事務長、各大学の医療安全の教授方など、2020年コロナ禍の真ただ中で病院長になった自分を支えてくれました。登録紹介医の先生方、川崎市議やLions Clubの方々にも、市民目線で様々なことを教えられました。コロナ禍後の病院経営立て直しのための山本理事主導のTREPや指定管理者制度を含めた川崎市との交渉が、さらに自分を育てる糧となりました。

今後は、中からではなく、外から聖マリアンナをサポートする側に回ります。拠点は生まれ育った横浜市緑区に移りますが、西部病院と大学病院の間に位置する急性期医療機関として、面で地域の医療を支える活動を共に展開できればと考えています。今後とも宜しくお願い致します。

令和7年度 定年退職者一覧

区分	所属	役職名	氏名
医学部	神経精神科学	主任教授	古茶 大樹
	応用分子腫瘍学	大学院教授	太田 智彦
	循環器内科学	教授	水野 幸一
	代謝・内分泌内科学	教授	太田 明雄
	代謝・内分泌内科学	教授	方波見 卓行
	神経精神科学	教授	小野 和哉
	心臓血管外科学(心臓血管外科)	教授	西巻 博
	脳神経外科学	教授	長島 梧郎
	耳鼻咽喉科学	教授	瀬尾 徹
	救急総合診療	教授	榊井 良裕
	脳神経外科学	診療教授	植田 敏浩
	消化器内科学	准教授	松田 浩二
	薬理学	准教授	武半 優子
	循環器内科学	講師	戸兵 雄子
	神経精神科学	講師	袖長 光知穂
	血液・腫瘍内科学	助教	鈴木 義則
	麻酔学	助教	岡田 吉史
	総務部	執行役員	菅原 敏弥
	IT戦略推進室	執行役員	下平 秀文
	総務部	部長	中村 孝史
	人事部	部長	長谷川 修
	大学院アイソトープ研究施設	主幹	甲斐 敦子
	保健管理センター	課長補佐	関 浩治
	脳神経内科学	主任	石川 美穂
	皮膚科学		玉置 真弓
	解剖学		森島 美樹
	看護専門学校	看護専門学校	執行役員
看護専門学校		教科科長	今井 みゆき
大学病院	看護部	師長	神山 明子
	看護部	副師長	山口 香
	看護部	副師長	永田 ノリ子
	看護部		杉田 裕美
	看護部		手塚 薫
	看護部		三田 美穂子
	看護部		橋口 とみ子
	臨床検査技術部	参与	山崎 哲
	臨床検査技術部	参与	井野 ちさと
	臨床工学技術部	係長	大野 俊夫
	臨床工学技術部	係長	中川 修一
	臨床検査技術部	主事	下川 百合子
	診療放射線技術部	技術課長補佐	吉田 久夫
	栄養部	主任	小島 久美
	医療安全管理室	主幹	小林 信
	医療安全管理室	主幹	内川 隆子
	事務部管理課	主幹	増原 直子
	事務部医事課	主査	西田 恵子
	事務部医事課	係長	高松 美穂
診療記録管理室		大隅 真由美	
西部病院	看護部	副師長	日下部 啓子
	看護部	主任	岡本 延枝
	看護部		大熊 由美
	耳鼻咽喉・頭頸部外科	主査	岡本 直子
	耳鼻咽喉・頭頸部外科	主査	寺田 ひろみ
	臨床検査部	技術課長	川口 珠巳
	臨床検査部	技術課長補佐	粕谷 佳菜子

皆様への感謝と軌跡

看護専門学校 校長
鈴木 昌子



長きにわたり、皆様のご指導を賜り、令和8年3月31日をもって退職いたしました。これまでの皆様のご厚情に心より感謝申し上げます。

聖マリアンナ医科大学病院に看護師として6年、聖マリアンナ医科大学看護専門学校に35年勤務させて頂きました。秀でた能力を持たない私の信条は自身の能力を知り、与えられたことを最後まで一生懸命やり遂げることでした。

臨床ではよき先輩と出会い看護実践の意義を実感しました。看護専門学校では多くの学生と出会い、様々な場面を通して看護とは何かを伝えることができました。ある卒業生が実習中に鈴木先生に「おこがましいよね」と言われたことを伝えてくれました。それは学生にとって、自身の看護が自分本位であったと気づく転機となりました。対象者の望みに寄り添うことの大切さを学び、一瞬の関わりが学生の可能性を大きく広げることを示した事例です。一方で、

その言葉選びの是非を省みるとき、教育者が持つ影響力と責任の重さを改めて痛感させられる場面でもありました。

最後の6年間は校長職を拝命しました。コロナ禍での就任であり、学生の学びを止めないこと、平時の備えの重要性を実感させられた数年でした。時代を俯瞰し、できる限り小さな変化も見落とさないよう、学生が未来に向けて、自分自身の生きる姿勢、その中で看護専門職としてどうありたいか未来に向けて考えていけることを目指していました。

どのような状況下でも多くの方々に支援をいただき、困難な時こそ一丸となり力を発揮してくれるスタッフに恵まれたことで無事退職の日を迎えることができました。本当にありがとうございました。皆様のご多幸と、聖マリアンナ医科大学のさらなる発展をお祈りし、退職のご挨拶とさせていただきます。

区分	所属	役職名	氏名
多摩病院	臨床検査部	技術課長補佐	青柳 恵美子
	画像診断・治療部	参与	宮崎 寿哉
	画像診断・治療部	主幹	青柳 博樹
	画像診断・治療部	主査	三野宮 英哉
	栄養部	副部長	吉田 美紀
	医療安全管理室	主幹	泉谷 裕行
	看護部	副師長	和久 美幸
	看護部		高木 祥子
	看護部		小野 千穂
	看護部		佐藤 恵美
画像診断部	主査	松元 誠	
事務部総務課	主任	上野 明子	

就任のごあいさつ

医学部長就任のご挨拶



医学部長
川畑 仁人

このたび、加藤智啓前医学部長の後任として、本年4月より聖マリアンナ医科大学医学部長を拝命いたしました。身に余る重責ではございますが、本学のさらなる発展のため、全力を尽くしてまいります。

私はこれまで、本学リウマチ・膠原病・アレルギー内科主任教授として診療・教育・研究に携わりながら、研究振興委員長、カリキュラム委員長として研究推進と医学教育の充実にも取り組んでまいりました。

AIやデータサイエンス、ゲノム医療、再生医療など医療の可能性が広がる一方、超高齢社会や地域医療の持続可能性など、向き合うべき課題は複雑かつ多様化しています。こうした時代にあって、変わらぬ建学の精神を大切にしながら社会の変化を的確に捉え、新たな医学・医療を先導できる人材を育てることが求められています。

今後は、学生が主体的に学び、プロフェッショナルリズムと科学的思考力を育む教育、国際的視野の涵養、先端研究に挑戦するリサーチマインドの育成に力を注いでまいります。新入院棟および新外来棟の整備による充実した基盤を活かし、地域に根ざしながら国内外に開かれた活力あ

る医学部を、皆様とともに築いてまいります。何卒ご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

略 歴

- 平成 4年 3月 東京大学医学部医学科 卒業
- 平成 4年 6月 東京大学医学部附属病院 研修医
- 平成 5年 12月 東京都立墨東病院救命救急センター 研修医
- 平成 6年 6月 国立病院機構相模原病院 内科
- 平成 11年 3月 博士(医学)取得(東京大学)
- 平成 11年 4月 東京大学医学部附属病院 アレルギー・リウマチ内科 医員
- 平成 13年 7月 東京大学医学部附属病院 アレルギー・リウマチ内科 助教
- 平成 23年 6月 東京大学医学部附属病院 アレルギー・リウマチ内科 特任講師
- 平成 24年 4月 東京大学医学部附属病院 アレルギー・リウマチ内科 講師
- 平成 26年 4月 東京医科大学(現：東京科学大学) 膠原病・リウマチ内科 准教授
- 平成 29年 4月 聖マリアンナ医科大学 リウマチ・膠原病・アレルギー内科学 教授
- 令和 8年 4月 聖マリアンナ医科大学 医学部長

AI時代の医学を先導し、未来の医療を拓く大学院へ



大学院医学研究科長
山野 嘉久

今、医学を取り巻く環境は、基礎研究、臨床研究、診療、データサイエンスが急速に融合する時代に入っています。とりわけ医学研究はAIにより大きな転換点を迎えており、電子カルテ、画像、ゲノム、オミックス、レジストリ情報を統合し、AIと人間の洞察を組み合わせることで、疾患理解や創薬・治療開発が加速しています。本学も倫理性と信頼性を重視しながら、AI時代の医学研究を先導する教育・研究環境を整え、臨床の現場から生まれる課題を基礎研究で深く解き明かし、レジストリ・バイオバンクなどの研究基盤を活用して新たなシーズを探索し、臨床へ還元していくトランスレーショナル研究をさらに発展させると共に、新しい研究スタイルや学問の創造に挑戦します。また、診療科や講座の枠を越えた横断的な研究支援体制を整備し、全学の知と技術を結集できる組織づくりを進め、さらには国内外の研究機関との交流も推進し、若手研究者が世界に挑戦できる機会を広げます。教育においても、大学院生一人ひとりが自ら問いを立て、異分野と協働しながら問題解決に真摯に取り組み、未来の医療の進歩と健康長寿社会の実現に貢献できる力を育む場にした

いと考えています。大学院の魅力を高め、多くの学生が「ここで学び、研究したい」と感じる大学院となるよう、大学院研究科長を身の引き締まる思いで拝命致しました。皆様と力を合わせて取り組んで参ります。よろしくようお願い申し上げます。

略 歴

- 平成 5年 3月 鹿児島大学医学部卒業 同年医師免許取得
- 平成 9年 3月 同大学大学院内科学修了 博士(医学)取得
- 平成 12年 7月 米国 National Institute of Health ポスドクフェロー
- 平成 15年 7月 同大学 脳神経内科学 助教
- 平成 18年 7月 同大学 脳神経内科学 助教
- 平成 19年 4月 同大学 難病治療研究センター ゲノム医科学 部門 講師
- 平成 20年 5月 同大学 同センター 病態解析部門 部門長・准教授
- 平成 28年 4月 同大学大学院 先端医療開発学 大学院教授
- 令和 2年 4月 同大学 脳神経内科学 教授
- 令和 4年 4月 同大学 脳神経内科学 主任教授
- 令和 8年 4月 同大学大学院 研究科長

主任教授就任にあたって



神経精神科学 主任教授
中川 敦夫

令和8年4月1日付けで神経精神科学主任教授を拝命いたしました中川敦夫です。この場をお借りして、これまでご指導・ご支援を賜りました皆様に心より御礼申し上げます。また、古茶大樹先生の後任として本教室の舵取りを担うこととなり、大変光栄に存じますとともに、その責務の重さに身の引き締まる思いであります。

本教室はこれまで、臨床に根ざした教育と研究を基盤に発展してまいりました。今後はその伝統を継承しつつ、「臨床第一主義」を掲げ、患者一人ひとりに最適化された精神科医療の質向上に努めてまいります。教育においては、エビデンスに基づく診療と個別化医療を両立し、多職種連携の中核を担う人材育成に注力します。臨床では、薬物療法に加え、認知行動療法やrTMS・mECTなどの身体的治療を組み合わせ最適化し、時代の要請に応じたデジタル治療の実装も推進します。教室運営にあたっては、学内外の機関と積極的に連携し、相互に学び合いながらともに成長する開かれた講座を目指します。

今後も患者に寄り添う精神科医療を基盤に、地域と未来に資する人材育成とエビデンス創出に取り組み、本学の発展に貢献してまいります。

今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくようお願い申し上げます。

略 歴

- 平成 11年 3月 慶應義塾大学医学部卒業
- 平成 11年 5月 慶應義塾大学病院 研修医(精神・神経科)
- 平成 16年 5月 慶應義塾大学医学部 精神・神経科学 助手
- 平成 16年 7月 米国 Columbia University College of Physicians and Surgeons, Department of Psychiatry, Research Fellow
- 平成 18年 4月 慶應義塾大学大学院医学研究科内科学系精神神経科学専攻博士課程
- 平成 22年 3月 博士(医学)取得(慶應義塾大学)
- 平成 23年 7月 国立精神・神経医療研究センタートランスレーショナルメディカルセンター臨床研究教育研修室長/同センター認知行動療法センター 研究開発室長
- 平成 25年 4月 慶應義塾大学医学部クリニカルリサーチセンター臨床研究教育研修室長/特任講師
- 令和 元年 10月 慶應義塾大学医学部臨床研究推進センター教育研修部門長/特任准教授
- 令和 4年 4月 聖マリアンナ医科大学 神経精神科学 教授
- 令和 8年 4月 聖マリアンナ医科大学 神経精神科学 主任教授

人を育てることは、本学の未来を築くこと



医学教育文化部門(医学教育研究分野) 主任教授
望月 篤

令和8年4月1日付けで、医学教育文化部門 医学教育研究分野 主任教授を拝命いたしました。大変光栄に存じますと同時に、その責任の重さに身の引き締まる思いがいたします。これまでご指導・ご支援を賜りました諸先生方ならびに関係の皆様へ、心より御礼申し上げます。

当分野の役割は、医学部における卒前教育だけでなく、臨床研修をはじめとする卒業後教育、さらには法人内の人材育成にまで及んでいます。医師の養成はもとより、看護職、医療技術職、事務職員など、さまざまな立場の方々それぞれの力を発揮し、互いに学び合いながら成長していくことは、より良い医療と大学運営を支える大切な基盤であると考えています。医療を取り巻く環境が大きく変化している現在、知識や技術を身につけることに加え、高い倫理観や豊かな人間性、多職種で協働する力を育むことが、これまで以上に重要になっています。教育とは、知識を伝えるだけではなく、人と人が関わり合いながらともに育っていく営みでもあります。人を育てることは、本学の未来を築くこと。その思いを大切にしながら、教育の質の向上と学びの環境づくりに努めてまいります。

微力ではございますが、本学ならびに

法人全体の発展に少しでも貢献できるよう、誠心誠意取り組んでまいります。今後とも、ご指導・ご支援のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

略 歴

- 平成 4年 3月 聖マリアンナ医科大学 医学部医学科 卒業
- 平成 4年 6月 聖マリアンナ医科大学病院 初期臨床研修医
- 平成 8年 5月 癌研究会附属病院 呼吸器外科 フェロー医
- 平成 10年 3月 聖マリアンナ医科大学 大学院 医学研究科 博士課程 修了
- 平成 10年 5月 聖マリアンナ医科大学 第三外科学 助手
- 平成 14年 4月 聖マリアンナ医科大学 外科学(呼吸器外科) 講師
- 平成 15年 4月 聖マリアンナ医科大学 東横病院 外科 副部長
- 平成 25年 1月 聖マリアンナ医科大学 医学教育文化部門 医学教育研究分野 講師
- 令和 3年 2月 聖マリアンナ医科大学 医学教育文化部門 医学教育研究分野 准教授
- 令和 5年 9月 聖マリアンナ医科大学 医学教育文化部門 医学教育研究分野 教授
- 令和 8年 4月 聖マリアンナ医科大学 医学教育文化部門 医学教育研究分野 主任教授

病院長就任にあたって

川崎市立多摩病院 病院長
奥瀬 千晃



校長就任のご挨拶

看護専門学校 校長
清水 泰子



令和8年4月1日付けで川崎市立多摩病院の病院長を拝命いたしました。日頃より、当院の運営ならびに日々の診療に対し、皆様から多大なるご支援とご協力を賜っておりますこと、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

当院は、川崎市北部における「急性期医療」「救急医療」「災害時医療」を担う、市内3番目の市立病院として誕生し、本年、開院20周年という大きな節目を迎えました。この記念すべき年に舵取りという大役を仰せつかり、その職責の重さに身の引き締まる思いです。

当院は「公設民営」という形態を活かし、公立病院の公共性を堅持しつつ地域医療支援病院として近隣の医療機関と緊密に連携し、地域に根差した医療体制を築いてまいりました。医科大学が運営を担うことで、高度な専門医療の提供と、次世代を担う医療人を育む教育・研究体制の両立を実現しております。今後は、附属病院間の連携をさらに強化することで、地域完結型医療の拠点として地域医療に一層貢献していく所存です。

医療環境が激変する今日、当院が着実な歩みを続けてこられたのは、ひとえに現場を支える教職員一人ひとりの献身的な努力の賜物に他なりません。この盤石な体制をさらに強化し、職員が誇りを持って研鑽を積める環境づくりに注力いたします。

聖マリアンナ医科大学の建学の精神を胸に、本学、地域、行政を結ぶ架け橋として、市民から信頼される病院であり続けるよう邁進いたします。皆様のより一層のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

略 歴

- 平成 4年 3月 聖マリアンナ医科大学 医学部医学科 卒業
- 平成 4年 5月 第86回医師国家試験合格 (医籍登録 第351152号)
- 平成 4年 6月 聖マリアンナ医科大学病院 研修医 (第2内科学)
- 平成 6年 4月 同 第2内科病院助手
- 平成 11年 4月 聖マリアンナ医科大学 内科学 (消化器・肝臓内科) 助手
- 平成 14年 4月 Georgetown University, Maryland, USAへ留学
- 平成 18年 4月 聖マリアンナ医科大学 内科学 (消化器・肝臓内科) 講師
- 平成 23年 4月 同 内科学 (消化器・肝臓内科) 准教授
- 平成 26年 4月 川崎市立多摩病院 副院長 同 消化器・肝臓内科部長
- 平成 26年10月 同大学 内科学 (消化器・肝臓内科) 病院教授
- 平成 28年 9月 同病院 総合診療内科部長を兼ねる
- 令和 2年 4月 同大学 内科学 (総合診療内科) 病院教授に配置換え
- 令和 5年 4月 同大学 総合診療内科学 教授 (講座名称変更)
- 令和 8年 4月 川崎市立多摩病院 病院長

令和8年4月1日付けをもちまして、本校の校長を拝命いたしました。私自身、本校で看護の基礎を学んだ卒業生の一人です。同窓生として初めてこの大役を仰せつかったことに、深い縁を感じるとともに、その職責の重さに身の引き締まる思いです。

本校は開校以来、「キリスト教的人類愛」と「生命の尊厳」を教育の基盤に掲げてまいりました。一人ひとりの命をかがえのないものとして尊び、対象者の苦しみや想いに寄り添い、その立場に立って考え行動する。私たち教職員は、この精神を何よりも大切にしながら、日々の看護師養成に情熱を注いでおります。

現在、本校は「新校舎への移転」という大きな転換期を迎えています。この大きな節目にあたり、校長としての私の使命は、学生が学びを止めず、教職員が教育に専念できる「安全・安心な教育基盤」の構築に注力することと考えております。

移転によって校舎というハード面は一新されますが、私たちが連綿と受け継いできた「建学の精神 (マリアンナ・スピリット)」というソフト面を改めて見つめ直し、次世代の看護学生たちへと確実に繋いでいくことこそが肝要であると考えております。

この任務を遂行するためには、実習施設や地域の皆様、そして法人内関係各所の皆様との連携をこれまで以上に深め、一歩ずつ着実に歩みを進めていく所存です。今後とも、本校の発展のために変わらぬご指導とご鞭撻を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

略 歴

- 昭和 61年 3月 聖マリアンナ医科大学 看護専門学校 卒業
- 昭和 61年 4月 聖マリアンナ医科大学病院看護部 (小児外科病棟) 入職
- 平成 8年 4月 聖マリアンナ医科大学 看護専門学校 専任教員
- 平成 10年 3月 厚生労働省看護研究研修センター看護師養成所 教員専攻 修了
- 平成 16年 4月 聖マリアンナ医科大学看護専門学校 教務科長補佐
- 平成 19年 9月 放送大学教養学部生活と福祉専攻 学士 (教養学) 取得
- 平成 22年 3月 東邦大学大学院医学研究科看護学専攻修了 修士 (看護学) 取得
- 平成 29年 4月 聖マリアンナ医科大学 看護専門学校 教務科長 (教務主任)
- 令和 6年 4月 聖マリアンナ医科大学 看護専門学校 副校長
- 令和 8年 4月 聖マリアンナ医科大学 看護専門学校 校長

令和8年度 第56回 医学部医学科 入学式

「チーム」の絆と「人類愛」を大切にして、自ら学び続ける医療人へ



明石勝也 理事長の祝辞

4月4日(土)、穏やかな春の良き日に、令和8年度第56回医学部医学科入学式が執り行われ、117名の新生が、夢と希望に満ちて医学の道への確かな第一歩を踏み出した。

北川博昭学長は式辞の中で、新生について「単なる競争相手ではなく、6年間苦楽を共にするかけがえのない『チーム』である」とし、互いを思いやりチームワークを大切にするよう激励した。さらに、「大学で

の学びは講義室だけではない」と述べ、部活動や海外研修、そして多様な人格を持った仲間との交流を通じてコミュニケーション能力を磨き、自ら学び続けることを楽しみながら、日々の臨床の中にときめきを見出せる医師へと成長してほしいと語りかけた。

続いて、明石勝也理事長は祝辞において、これから約1年後には大学病院の建て替えが、旧病院棟の解体をもって終了し、菅生キャンパスに新しい開放的空間が誕生することに触れた。また、新生に向けて聖書の「善きサマリア人」の例え話を紹介し、「隣人を自



宣誓をする中村怜雅さん



北川博昭 学長の式辞

分のように愛することこそが人類愛の本質であり、医療の原点である」と本学の建学の理念の重要性を説いた。そして、激動の変革時代にあっても時代の先を読む意識を強く持ち、自らのキャリア形成に力を注ぐよう求めた。

同窓会である聖医会の岸忠宏会長からは、医療環境が日々高度化・多様化しても「患者さんに寄り添う心」は決して変わらないと述べ、「もし悩み事や相談事がある時は、教育棟7階にある聖医会事務局を気軽に訪ねてほしい。お手伝いできることがあれば全力で力になりたいと思っています」と新生を温かく迎え入れる言葉が贈られた。

次に中村怜雅さんが入学した喜びを述べるとともに、学則を守り学業に精励することを宣誓した。続いて、在校生代表が歓迎の辞を贈った。

最後に、小田武彦司祭 (宗教学特任教授) の祈願、校歌斉唱が行われ閉式となり、117名の新生は実りある6年間に向けて決意を新たに出発した。

入学学生喜びの声

全人的な医療を提供できる 医師を目指して

医学部 中村 怜雅



まずは、入学式を執り行って頂いた大学関係者の皆様、参列して頂いた保護者の皆様に御礼申し上げます。

将来医師を目指す身として、聖マリアンナ医科大学に入学できたことを大変嬉しく感じております。聖マリアンナ医科大学の学生として、将来医師となることを自覚し、医学はもちろんのこと、人と協力することや人を理解することについても積極的に学んでまいります。

患者さんの病気を単に治療するだけでなく、予防、治療、リハビリを含めた包括的な医療を提供できる医師になるために日々精進してまいります。

令和8年度 第50回 看護専門学校 入学式

「人類愛」と「生命の尊厳」を礎に、 新時代の地域医療を支える看護師へ

4月8日(水)、穏やかな春の良き日に、令和8年度第50回看護専門学校入学式が執り行われた。本校の歴史において半世紀の節目となる記念すべき「50回生」として、夢と希望に満ちた新生たちが看護の道への確かな第一歩を踏み出した。

式辞では清水泰子校長が、これま



誓いの言葉を述べる高橋亜美さん

でに4,243名の卒業生を全国の医療現場へ送り出してきた本校の揺るぎない伝統に触れた。そして、本校の教育理念である「キリスト教の人類愛」と「生命の尊厳」について語り、「看護とは単に病を治す手助けではなく、目の前のかけがえのない命を慈しみ、相手の想いを尊重しながら寄り添うことである」と説いた。高度化する現代医療の中で、「深い人間愛を備えた専門職業人へと成長し、今日この日の『初心』を忘れずに歩んでほしい」と温かな激励の言葉を贈った。

続いて明石勝也理事長は祝辞の中で、

1971年の創立時にローマ教皇パウロ6世からカリスとパテナを拝受した異例の歴史に触れ、本学への期待の大きさを紹介した。また、日本が「新たな地域医療構想」のステージへ移行し、高度急性期から在宅医療まで連続性のある医療体制が求められる中、その中心的な役割を担うのは看護師であると強調した。職域が拡大し国民から大きな期待が寄せられる中、「建て替えが完成し最新設備が整った先進の大学病院での実習を楽しみに、確かな知識と技術を学ぶとともに、豊かな心を育ててほしい」と期待を寄せた。

その後、在校生による歓迎のことばや新生生の誓いのことばが述べられ、最後に小田武彦司祭による祝福の祈りが捧げられ、式は滞りなく閉幕した。新生生たちは、歴史ある学び舎での充実した3年間に向けて決意を新たにしました。



式辞を述べる清水泰子校長

□■入学生喜びの声■□

患者さんの心に寄り添う 温かい看護師を目指して

看護専門学校
高橋 亜美



私は、部活動で怪我や体調を崩す部員を目の当たりにしながらも、知識やスキルがなく、何もできない自分に無力さを感じた時、人の役に立ちたいという思いが芽生えたことが看護師を目指すきっかけでした。

看護師という仕事は、病気や怪我で苦しんでいる人を助けることで社会貢献ができ、何より全世代の人の役に立てるという点にやりがいを抱きました。

患者さんの心に寄り添い、笑顔絶えず温かい雰囲気を作る看護師になるため、仲間と支え合いながら社会を担う人間性と知識を身につけることを誓います。

第68回 東日本医科学学生総合体育大会(冬季)

アイスホッケー部

アイスホッケー部は、今年度の東医体に出場し、1勝3敗という成績を収めました。初戦に敗れ、目標としていたBリーグ昇格は叶いませんでしたが、卒業を控える6年生のためにも何とか1勝を挙げようと、チーム一丸となって試合に臨みました。

その1勝では、1年生が2ゴール1アシスト、6年生も2ゴール1アシストと、全学年が活躍し、必然とも言える勝利を掴むことができました。キャプテンとして2年間チームを引っ張ってきた6年生の存在は大きく、下級生も試合を重ねるごとに成長が見られました。

悔しさの残る大会ではありましたが、部員からは「早く練習したい」という声が多く聞かれ、次に向けた

意欲で満ちています。アイスホッケー部は、プレイヤー13人、マネージャー10人が一体となり、45分間全員が力を合わせて戦い抜くチームです。

今後も下級生まで一体となり、きたる新生生を引っ張り、さらなる成長を目指して活動していきます。



スキー部

スキー部は、現在24名の部員で活動しています。活動内容は、毎週月曜日に陸上トレーニングを行っている他、7月には夏合宿、12月と2月に志賀高原横手山・渋峠スキー場で冬合宿を行い、3月に行われる東医体、オールメディカルに参加しています。今年度の東医体では、ジャイアントスラロームにおいて悲願の個人成績1位、スラロームで2位というとても嬉しい結果を残すことができました。

また、競技の特性上、費用の面で苦労しがちなスポーツですが、OB・OGの皆様をはじめとする様々な方のサポートのおかげで、恵まれた環境で活動することができています。この場を借りて日頃からの感謝をお伝えするとともに、大変恐縮ではあ



りますが、今後ともご支援いただけますと幸いです。

さて、普段の部活動での交流や月に1回開催されるご飯会に加えて、各合宿や突発的に開催される日帰り旅行、卒業旅行など、日々のイベントを通して、私たちは学年に関係なく非常に仲良く活動しています。この大学6年間におけるスキー部での出会い・経験・思い出は、人生の宝物の一つになることは間違いありません。これまで先輩方、OB・OGの皆様にしてきていただいたことへの感謝を忘れず、今後も活動に全力で取り組んでいきたいと思っております。

◆連載-4◆

在学生紹介 — 医学部学生インタビュー

今回ご紹介するのは、医学部5年生の林莉沙さんです。勉学に励む傍ら、ラグビーのレフリー(審判員)としても活躍されています。

医学部5年生 林 莉沙さん



— 医師を志望したきっかけを教えてください。

父、祖父、曾祖父と代々消化器外科の医師であることが大きいです。また、医局説明会に足を運んだ結果、医局の雰囲気も良く消化器外科に魅力を感じています。

— 林さんご自身はラグビー未経験とのことですが、どのようなきっかけでラグビーに関わるようになったのでしょうか？

総合教育科目で仲良くなった先輩に



勧誘されたことがきっかけで、マネージャーとして入部しました。ラグビー部は、上下関係が厳しすぎず、選手もマネージャーもとても仲が良く、のびのびと活動しています。

— マネージャーとして活躍される一方で、ラグビーの審判資格(レフリー)も取得されたとお伺いしました。どのようなきっかけがあったのでしょうか？

マネージャーとして、様々な経験を積み充実していた一方で、「やれることはやり尽くした」と感じ、自身の成長のため、またチームのために自分ができることは何かと考えたときに、2年生の冬にレフリー資格の取得を目指し始めました。当初は不安もありましたが、女子レフリーの存在を知ったことや、コーチから「やる気次第でできる」と励ましの言葉をいただいたのが大きな後押しとなり

ました。

— レフリーとして、どのような試合で笛を吹かれていますのですか？

C級レフリーの資格を取得し、本学も加盟している「関東医歯薬大学ラグビーフットボール連盟」の試合で吹くことが多いです。その他にも、関東女子大会でアシスタントレフリー(副審判)として、また高校生、中学生の試合でも務めています。

また、本学の練習試合などでも他へ依頼することなく審判ができることは、部活の役に立っているかなと思っています。

— 審判として、大切にしていること、また嬉しかったエピソードはありますか？

最も重視しているのは、「プレイヤーへのリスペクト」です。上から目線にならず、選手がやりたいプレーをサポートできるよう、反則を厳しく取るのではなくやらせないように促す「プリベントコール」を心がけています。先日、試合後に選手から「話を聞いてくれるレフリーだったから助かった」と言われたことが、本当に嬉しかったです。私が大切にしている「プレイヤーへのリスペクト」が、選手に伝わった証だと感じました。

— 部活や審判活動など、多忙な中でどの

ように学業と両立させているのでしょうか？

体力には自信がある方で、週3回のラグビー部の活動にはできる限り参加し、日曜日は外部でレフリー活動を行っています。また、ダンス部にも所属しており、昨年は部長も務めていました。勉強は直前期に集中して一気に行うなど、メリハリをつけて活動を続けています。ラグビーは脳震盪や骨折といった大きな怪我が多い競技であり、医師としての知識はレフリー活動においても、選手の安全や交代判断に役立つため、新しい知識を得ることにやりがいを感じています。

— 今後の抱負をお願いします。

将来は、父の「勉強に終わりは無い」という言葉を胸に、最新の情報を学び続ける消化器外科医を目指し、父と一緒に仕事ができればいいなと思っています。もちろん、レフリーとしてラグビーに関わり続けたいと考えています。

終始、明るく笑顔がとても素敵な林さん。インタビュー後も、元気よくダンスの練習へ向かわれました。林さんの今後の活躍を楽しみにしております。

総務課 木村孔美、内田絵海

離島医療と臨床研修の学び —長崎県五島市・聖マリア病院を訪ねて—

前 臨床研修センター長 古田繁行

このたび、聖マリアンナ医科大学病院臨床研修センターの臨床研修協力施設として新たに加わる長崎県五島市の聖マリア病院を視察してまいりました。当地は離島であるにもかかわらず、毎年10人弱の学生や研修医が実習・研修に訪れる、長崎でも人気の高い病院と伺っていました。実際に足を運びますと、その評価の理由は設備や規模にとどまらず、院内に通底する落ち着いた雰囲気と丁寧な説明が生み出す「安心の空気」にあることを実感いたしました。

院長の山中淳子先生は本学の13回生であり、医師としての専門性に加えて、シスターとして人を支える姿勢を体現されております。離島の現実の中で「若い医師や学生の学びの場を守り育てたい」という静かな決意が伝わってまいりました。離島医療では、天候や交通事情が診療に直結し、限られた資源の中で判断と調整が求められます。そこでの経験は、将来どの地域で働く医療者にとっても、患者さんの生活背景を踏まえて

医療を組み立てる視点を養ううえで、大きな学びになると考えます。

また、故・山本善次郎司祭の墓前(三井楽(みいらく)地区)にも伺いました。海と空の広がりの中に立ちますと、医療は技術や制度だけで成り立つのではなく、人を思い、祈り、支える営みの上にあることを改めて感じました。母校の精神が五島の地にも息づいていることは、同窓として大きな励みとなりました。

臨床研修協力施設としての連携を着実に深め、五島での学びが次世代の研修医の糧となり、地域医療の持続にも資するよう、臨床研修センターとして責任をもって取り組んでまいります。末筆ながら、温かく迎えてくださった聖マリア病院の皆様へ心より感謝申し上げます。



↓ 山本善次郎司祭墓前

聖マリア病院にて 山中淳子院長(左から3番目)



心臓血管外科学

教室・施設紹介 31

愛で支え、技術で救う

心臓血管外科学 主任教授 縄田寛、助教 杵淵聡志

近年、神奈川県北東部地域における循環器医療を取り巻く環境は大きく変化しています。高齢化の進行に伴い、心不全、弁膜症、大動脈疾患などの循環器疾患患者は増加傾向にあり、地域の医療需要は年々高まっています。一方で、急性心筋梗塞や急性大動脈解離といった時間依存性の高い疾患に対しては、迅速かつ高度な専門治療が求められ、これらに対応可能な医療機関の役割はますます重要となっています。

また、心臓血管外科領域では医療技術の進歩により、治療はより低侵襲かつ高度なものへと発展してきました。カテーテル治療や内視鏡手術など新しい治療法が次々と登場する中で、患者一人ひとりにとって最適な治療を選択し、安全に提供することが我々医療者の責務です。急速に進歩する医療技術の中で、ベストプラクティスを構築し続ける不断の努力が求められています。

こうした状況の中で、聖マリアンナ医科大学心臓血管外科は、地域の中核医療機関として心臓・大血管疾患に対する外科治療を担うとともに、循環器内科や地域医療機関との連携を通じて、急性期から慢性期まで一貫した医療の提供を目指しています。

近年、外科医志望者の減少が指摘される中、当科も決して十分とは言えない人員体制ではありますが、年間200例以上の心臓大血管手術を行い、関東でも上位に位置する症例数を維持しています。地域の医療機関と密接に協力しながら、「愛で支え、技術で救う」をスローガンに、すべての患者さんを「愛」で支え、確立された「技術」に基づいた高度な外科治療を安全に提供すること、目の前の患者さん一人ひとりに真摯に向き合い、その命を守ることが、神奈川県北東部地域における循環器医療の発展につながるかと信じています。これこそが、私たち医局員全員の使命です。



医史学研究室が開設

医史学研究室 大川順子

2025年10月、医学情報センター(明石嘉聞記念図書館)内に「医史学研究室」が誕生しました(室長 松田隆秀)。本学は50年を超える歩みを刻んでまいりましたが、これまで歴史資料を一元的に管理する専門部署は存在しませんでした。こうした背景

を受け、本学の identity を次世代へ継承し、医学の歴史を学術的に探求する拠点として本研究室が設立されました。

本研究室では、主に以下の2つの役割を担います。

1. マリアンナ・ヒストリーの資料収集と展示(資料館機能)
 - 創設者・明石嘉聞博士による設立までの軌跡や「建学の精神」の探求。
 - 「聖マリアンナ医科大学」の名称由来に関する史実の整理(図1)。
 - 大学設立から現在に至るまでの貴重な歴史資料の収集・公開。
 2. 歴史的資料の研究と学術発信
 - 図書館が所蔵する歴史的価値の高い資料の研究(図2)。
 - 研究成果の公開、および学会活動を通じた学術界への寄与。
- これら本研究室の活動を通じて、特に学生の皆さんには以下の目標を掲げたいと思います。
- **建学の精神の深化:** 自らが学ぶ大学のルーツを知ることで、志を再確認する。
 - **倫理観の涵養:** 医学史を通じて、先人たちが直面した課題や倫理的背景を学ぶ。
 - **相対的視点の獲得:** 現代医学を歴史の流れの中に位置づけ、客観的・多角的に捉える能力を養う。

図は本研究室が公開しているデジタルアーカイブで、図1は明石嘉聞博士とシスターマリアンナの紹介、図2は本学が所有するシーボルト直筆の書状です。

図2

図1



附属病院 施設だより

❖西部病院❖

インドネシアからの新たな風「特定技能員」を迎えました

2026年3月、インドネシアからの新たな風となる特定技能員4名を看護補助者(嘱託職員)としてお迎えしました。

特定技能員を迎え入れる主要なメリットをご説明します。

1. 体制の安定

これまで「急性期看護補助体制加算(25対1)」の施設基準を維持してまいりましたが、スタッフの入れ替わりが多い状況もあり、長期的かつ安定的な教育や運用に課題がありました。こうした状況を踏まえ、持続可能なチーム医療を実現するために、戦略的投資案件として特定技能員を迎え入れることを決断しました。

2. 医療の質の向上

スタッフの確保が安定し、持続可能なチーム医療体制を構築することで、提供する医療の質がさらに向上するものと期待しています。加えて、診療体制の充実、病院運営にも大



きく寄与するものであり、投資額を上回る効果が得られるものと見込んでいます。

3. 組織の活性化

特定技能員は嘱託職員としてシフトに沿って柔軟に勤務することができます。今回着任した4名はいずれも体力があり「日本で看護・介護のスキルを学びたい!」という強い意欲を持っています。若く熱意ある彼女たちの存在は、新しい風として看護チームに欠かせない戦力となり、既存のスタッフにも良い刺激となっています。



新しい仲間となった4名が、一日も早く日本の生活と病院の環境に慣れ、その笑顔を患者さんにお届けできるよう、病院全体で温かくサポートしてまいります。当院の新たな一步を温かく見守っていただければ幸いです。

看護部長 森みさ子

❖ブレスト&イメージング先端医療センター附属クリニック❖

滅菌業務の運用変更

ブレスト&イメージングセンターでは、2009年3月の開院以来、院内に設置された滅菌装置を用いた施設内での滅菌を継続してまいりました。しかし、医療を取り巻く環境の変化と、装置の経年劣化が進行している状況から2026年2月末をもって滅菌装置の使用を停止し、大学病院中央器材室による院外滅菌へと運用を全面的に移行いたしました。

開院してから17年の間、装置の度重なるメンテナンスを経て院内滅菌を継続してまいりましたが、その間

に国際的な感染管理基準は厳格なバリデーションと高度な無菌性保証を求めると時代へと推移いたしました。さらに、医療技術の進歩に伴い、使用される鋼製小物類は微細かつ複雑な形状へと進化を遂げております。

当院が今回決断した院外滅菌への移行は、特定機能病院である大学病院と同等の厳格な滅菌管理プロセスを導入することで、これまで以上に高い無菌性保証レベルの下、安全な医療を患者さんへ提供し続けることを可能とするための選択であると認識しております。

滅菌室はこの運用変更に伴い、装置の撤去と室内の改装を経て、本学難病治療研究センターが主導するフェノエアィ・ジャパン株式会社との共同研究の拠点として利用されることとなりました。

当院は、大学附属施設として先進的な研究へ貢献するとともに、理念としている「World class care」の医療を引き続き提供してまいりますので変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

次長兼事務室長 半澤宏宣



滅菌装置

❖多摩病院❖

開院20周年を迎えて

多摩病院は2026年2月1日に開院20周年を迎えました。

2月3日(火)には、院内の食堂で20周年をお祝いするパーティーが開催され、たくさんの教職員で食堂は賑わいました。テーブルには数々のお料理が並べられ、飲み物を片手に食事を楽しむ姿が印象的でした。会の途中では、200人分の大きなケーキが登場し、多くの教職員がスマホのカメラを構え、歓声が湧きあがりました。

そんな活気あふれる開院20周年パーティーのプログラムのひとつとして、「川崎市立多摩病院 開院20周年記念動画」が上映されました。この記念動画では、2005年6月に川崎市より指定管理者通知を受諾した時から多摩病院の歴史がスタートし、2006年2月1日に開院を迎え、地域医療支援病院としての承認や病院機能評価の受審といった病院機能の向上を目指してきたこと、また、東日本大震災をはじめとした日本各地への災害支援や登戸殺傷事件での対応、新型コロナウイルス蔓延時に多くの患者さんを受け入れてきたことなど、

これまで多くの社会貢献を果たしてきた多摩病院20年の軌跡が紹介されました。加えて、歴代の病院長や看護部長の皆様から寄せられた、在任当時の思い出や開院20周年を祝う温かなメッセージも収められており、多摩病院の歴史と未来への想いが感じ取れる内容となっていました。この動画を通じて、教職員の皆さんには、多摩病院がこれまでに刻んできた歴史や、病院の発展を支えて来られた先達の皆様のことを感じていただけたのではないかと思います。

パーティーに参加した教職員のアンケートでは、7割以上の教職員から、「当院の歴史を知ることができた」、「今の職場に誇りを感じた」といった声が寄せられ、開院20周年という節目を共有する意義深いひとときとなりました。

今後ともたくさんの年月を経て多摩病院の歴史は続いていきますが、これまでの軌跡を決して忘れることができないよう、受け継いでいくことができたと思います。

広報戦略室 土屋さとみ



200人分のケーキ



医学と医療、学生の思いを《未来》へつなぐ。 — 聖マリアンナ医科大学「みらい募金」 —

近年の社会情勢の変化により、大学運営を取り巻く環境はかつてないほど厳しさを増しています。本学におきましても、経費節減に努めておりますが、次世代の医師育成と最先端医療の維持には、さらなる財政基盤の強化が不可欠です。「生命の尊厳」を支える本学の使命を未来へつなぐため、皆様の温かいご支援を心よりお願い申し上げます。

ご寄付の活用目的 活用目的を指定してお申込みいただけます。(詳細は募集サイトをご覧ください)

- 1 学生活動サポート
2 教育研究サポート
3 医療サービスサポート
4 キャンパス整備サポート

税制上の優遇措置

個人の方は、「税額控除制度」or「所得控除制度」をご選択いただくことで、優遇措置を受けられます。法人の方は、「受配者指定寄付金制度」をご利用いただくことで、当該事業年度において全額を損金算入することができます。

【お問い合わせ先】

聖マリアンナ医科大学 財務部 寄付募集推進室
TEL: 044-977-8111 (内線 3981・3973) 平日 9:00~17:00
EMAIL: kifusuishin@marianna-u.ac.jp



スマホで簡単手続き
左記QRコード、または「マリアンナみらい募金」で検索。クレジットカード決済等でお申込みいただけます。

聖マリアンナ医大新聞編集委員会 委員名簿

(2026年5月1日現在)

*聖マリアンナ医大新聞は、年2回以上各6,000部を発行し各部署、附属病院、附属施設、名誉教授、聖医会、保護者会、教育関連病院、官公庁他に配布しております。

- 委員長 藤谷博人 [スポーツ医学 主任教授]
委員 竹村 弘 [微生物学 主任教授]
大平善之 [総合診療内科学 主任教授]
有戸光美 [生化学 准教授]
清水泰子 [看護専門学校 校長]
清水朋子 [栄養部 部長]
清水美紀 [看護部 師長]
島津幸二 [教学部 部長]
中村孝史 [総務部 参与]
奥島英明 [総務部 参事]
中村 隆 [総務課 係長]
松岡正代 [西部病院総務課 主幹]
島田久代 [多摩病院総務課 主幹]

